

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	五高佛教青年會事情雜況
Author(s)	清水, 和彦
Citation	龍南, 188: 88-89
Issue date	1923-12
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/8682">http://hdl.handle.net/2298/8682</a>
Right	

の爲に斃るゝ及び戰運漸く迫れば伊藤奮ひ村井を切り酒井に譲る。荒木奮然立ちて大いに戦ひたるも一本一本にて惜しくも破れ終に大將同志の一騎打となる。中島は三軍の將やゐら太刀を取りて立てば思ひ無量全軍活殺重き任を双肩に荷ひ猛然として戦ふ。然しながら終に戰の神は吾に幸しなかつた。我々は相抱いて泣いた。涼々として南に流るゝ鴨川の畔戰敗の苦き杯に我等は涙の限り泣いた。そして又來年こそ誓つた。來年こそ是非勝つて呉れ、來年こそ必ず勝たねばならぬ。

最後にこんなに拙い私共を熱心に指導應援下さいました、校長部長諸先輩及び京福で懇切に御世話下さつた、青柳、大迫、山縣の諸兄更に絶大の應援下さつた龍南健兒諸に厚く感謝申します。(委員手記)

## 五高佛敎青年會

### 事情雜況

文二甲三 清水和彦稿

由來我五高佛敎青年會は永い歴史と廣い活動範圍と充實さを經て來ました。その折

折の消長もありました。又著しい發展もありました。當時の敎授の援助外部からの援助を仰ぎ又外部に對しての傳道運動も記録に残つてゐます。五高佛敎青年會館の建設もありました。名士招聘の演說會もありました。然し其の新舊交代に伴ふ潮流の變化を認められますが、特に此の五六年に於て從來の方針に一新の革命的進展を見ました。即從來宗派的姑息な空氣を一掃し外部との接觸を斷絶し傳道的運動を停止し各自龍南健兒の意氣と熱と相擁して琢磨研鑽を標榜するに至つたのであります。即剛毅を旗幟とする龍南の一國家となつたのであります。當時の衝にあたつた人々には自己辨道の機會を作り外は青年會館の問題を處理し漸時内容の充實を計つたのです。

その當時の人々の意氣は實に男性的でした。我には眞理を求める爲に會合してゐるのであつて俗人と交る餘裕はない。他人へ傳へる何者もないと云ふのでした。此の處に自ら機縁が熟して澤木與道師を見出したのであつた。而來我會員は手を携へて川尻なる大慈寺に到り雲水の中にあつて嚴格な參禪をしてゐた。此の人々について下

村彌一氏草場弘氏等次に古閑潔氏河邊氏大迫尙隆氏相嗣いて我會を幹し、その進展を計られた。下村氏大迫氏等は當時龍南の中心人物であり又龍南の寵兒であつた。その人々の氣息に従ふ我會も又自ら龍南を中心としてゐたものであつて決して一味の人々の私の會合では決してありませんでした。

現在の我會には所謂會員名簿は存在しません。それはその時代の人々を凡て會員としてゐることにもあたります。誰もが眞理を求めること云ふ點に於て一つになつた時處が我會の生命であります。

又來る二月澤木老師の大徹堂に於て涅槃會に因んで一日から十五日まで坐禪がある筈であります。その折に指月禪師の坐禪用心記不能語の堤唱があることになつてゐます。此の本は實に坐禪の機微を徹底的に穿つた此の種類の書の唯一の權威です。而も版は失はれ絶版の不幸に遭つてゐますが幸ひ澤木老師の手元に二部あるので一部拜借して謄寫して五十部だけ製本しました。

指月禪師は暮末に勃興せんとした日本佛敎界に嶄然頭角を現はした曹洞宗の高僧で

所謂禪思想の絕對權威者です。去年の涅槃會に提唱された普觀坐禪儀不能語の著者ですがその面目は又格別に鮮明です。切におすめします。幸私が發起者になされたので澤木老師も今度は特に五高生に聞かしたから五高生をうんと連れて來いと言はれましたが、何となく的がないので此の龍南誌上で無縁の人々にも廣くお告げ致します。其の外二月の坐禪に就て御不審がありまして直接間接おたしを願ひます。

## 二葉會秋季展覽會 會報

田代教授

秋の川 (油) 田代教授  
新開地 (油)  
不知火海 (油) 理一甲一 速水 正路  
道 (油) 理一甲二 佐藤 巖  
獨樂 (油)  
ダリヤ (油)  
夜の靜物 (油)  
花瓶 (油)

文二甲一 林 茂  
スクツチ三點 (水)  
郊外にて (油) 文二甲一 大森 春四  
ホピー (油)  
秋 光 (油) 文二甲一 吉武 喜郎  
スクツチ (水) 文二甲二 大久保武雄  
スクツチ三點 (水) 文二甲二 山田 勝  
パン焼 (水)  
牧舎 (油)  
修道院へ行く道 (油) 理二甲 東 村  
烈 光 (水) 理二甲三 中村 淡山  
滿洲にて (水) 文三乙 島雄 順一  
並木 (水)  
黒石原 (水) 文三甲三 佐藤 達夫  
三角海 理三乙 山口 英夫  
初 秋 (油)  
凋落 (油)

春 夕 (油)  
塲末の暮 (油)  
丘の家 (油)  
苦葉はしげる (油)  
秋 物 (油)  
静物 (油)  
初秋の効果 (クレイヨン) 理三乙 大浦 正江  
晴 日 (油)  
友の肖像 (油)  
河、畔 (油)  
八月海 (油)  
暮るゝ海 (油)  
渡 場 (油)  
静物三點 (油)  
夕 暮 (油)  
渡場の朝 (油)  
黄 昏 (油)  
渡場(其二) (木)  
暮れ行く海 (油)  
風景三點 (水) 文三甲一 副島武之助  
この展覽會に於て會員中山田吉郎氏の作を見る事が出来なかつたこと、大浦氏の二十號二點、大森君の小品二點及び山口君の一點を都合上出すことが出来なかつたことを遺憾とします。今回は例年に比して盛大であつたことをまことによこぶ次第です。副島記す。